

方言における敬語

藤原与一

この題名は、編集部から与えられたものである。いわゆる敬語は、ことばづかいとして見れば、敬語法である。方言の敬語法を大観するのに、その性質は、まったく、待遇表現法と言ってよいものである。方言の生活は、つねになんらかの対話の生活だからである。

さてその待遇のしかたは、尊敬しようと、謙遜しようと、いわゆる「丁寧」の言いかたをしようと、要するに、もの言いをていねいにするということである。方言敬語、あるいは方言敬語法の生活は、「ていねい」意識のはたらく生活である。

ていねいにとのつもりで、話し手は、相手を、自己との関係において待遇する。また、第三者のことを、どのようにか待遇する。こうして、人的関係の把握を表現するのである。

方言の生活には、全国的に見て、諸相がある。そのとおりに、方言敬語の生活にもまた諸相がある。顕著な対照をなしているのは、東国（関東以北）と九州とである。

一口に言って、東国は敬語そのものが少い。西国にはさまざま

の敬語がある。現状にかぎって言うてみてである。たとえば尊敬の助動詞でも、西国には、「レル・ラレル」、「シャル・サッシャル」、「ナサル」、「ナル」、「イ・サイ」、「ナサンス」、「ンス・サンス」、「お……アル」、「ヤル」、「ヤンス・ヤス」のおのおのにわたるものがある。その変種、たとえば「ナサル」に対する「ナハル」のようなものも少くない。これにくらべると、東国は、「ナサル」関係のものがさかんであるほかは、西国ほどではない。

西国は、助動詞による尊敬の表現法を、こまかく分化せしめており、現にそれらを、そうとうに活動させている。東国は、形のうえに、西国ほどのものは見せていない。この種のことばは、いちおう、人々に、東国の敬語法は荒っぽいと思わしめやすい。

関東栃木県下の一例であるが、ここの一老女は、すこしなれた私どもに話すのに、

○アツカリモノヂヤ シンバイダヨ。

あずかりものでは心配だよ。

○マイニチ マイニチ、ホシクotte キテルノ。

毎日々々、それが欲しくって、うちへ来てるの。

という調子であった。また、この老女が、孫の幼女のことを、私

どもに、言うともなく言うのには

○誰子ノヤロー グツマイテ イヤガル。

誰子の野郎、ぐすぐず言つてやがる。

○アーアーナンチュテ イラー。

アーアーなんて言つてらあ。

というふうであった。関西以西だと、このような場合、およそこのうい程度には言わない。

九州南部ともなれば、待遇表現の言辭は、繁榮をきわめる。

○ドーカ オアガイヤッタモンセ

どうかお上がり下さい。

○イッモ オセワサエ ナイヤゲモス。

いつもおせわさまにあいなります。

のようにである。いわゆる敬語を重ねかけ重ねかけして、相手をよく待遇しようとする。つまり敬意を十分に形に打ち出そうとする。おのずから複雑な敬語法になる。

○

九州などの場合は、心を敬語形に出し切る体の言いかた——敬語法とされよう。それに対して、東国などは、心をそのまま相手になげかけていき、ことばの形はかまわぬ体の言いかた——そういう待遇表現法とされよう。

東国に、敬語の表現が無いのではない。敬語はにぎやかでなく、敬語法の形式の複雑なものではなくても、つまり、かなり多くの場合がいわゆる無敬語のような状態であっても、そのような外形をこえて、時に応じての敬意が表現されている。

ただその敬意の持ちかたなり、待遇心意のうごかしかたなりに、関西以西方面のそれとはちがった性格のあることはみとめら

れる。これは、言ってみれば、日常感性・生活感覚の、タイプの違いである。国の東西を旅行してみても、私どもは、東西のそれぞれの生活文化全般のうえに、ある類型差のあるのを感じる。

埼玉県下を旅している時のことであった。田園を走る電車の中で、聞くとおなじに聞くと、うしろに男女二人の会話が聞こえる。「何々ヨ。」という強調の文末助詞（文末詞）が出る。返事の、「ウン」と「ウー」との間のようなこえが、どちらからともなく聞こえてくる。「何々ダロー?」「何々ダネー。」。というのは、ひっきりなしに、どちらからも聞こえてくる。私はしばらくこの会話を味わって、男女差をことばの形のうえに見つけようとしたが、きっぱりとした差別は、見つけることができなかった。そこでしずかにふりむいて見ると、一人は年若い娘さんであり、一人は三十才の男性だった。親しい人どうしのようにであった。それにしても、この会話は、関西以西の、この種の会話場面のどんな会話とも、およそ似つかぬもののように思えたのである。

では、この若い女性は、年長の男性に対して、ぶしつけであつたらうか。じっさいは、そうではなくて、この時のこの女性には、まじめな表情がありありと出ていたのである。西の敬語法を、敬語形をそなえた敬語法と言うならば、東の敬語法は、無韻の韻の敬語法とも言うことができようか。——そう言えるふしがあると思う。

もちろん、東国にも、形をそなえた、かつは複雑でもある敬語法も、なくはない。たとえば陸中北部の軽米弁の上品なことばづかいとなるど、

○モツテ オデアツテ クダサリマセ。

持つていらして下さいませ。

など、形の複雑さもそうとうである。地区々々に見られる注目すべき敬語法、たとえば磐城陸前方面の「アカエイノーケライン。」(赤いのを下さい。)や秋田県下の「コッチャ オザッテ タンセ。」(こっちへおいで下さい。)その他を見ていると、以前には、今日以上に、前期的な敬語法が、各地でさかんであったか、と思われる。それが、どういふしだいであるか、今は、九州地方などにくらべると、東国一般は、日常的には、表現形式の簡素にしたがう敬語生活となっている。

さて、西の敬語法も、敬語形をそなえた敬語法とは言い、そのような形をそなえなければ敬意はないというふうなものではない。西にもまた、簡素の中に、十分の敬意を表現することがあり得る。

そのような簡素な形式での敬意表現法の、もっとも有力なきめ手となるのは、待遇表現の文末をおさえる文末助詞(文末詞)である。この文末詞による敬意表現法、いわばていねいなことばづかいを、敬語法としての文末助詞法、あるいは待遇表現の文末法とよぼう。

文末詞は、国語方言の生活のどこにも見いだされる。が、その種類種別の繁榮のありさまとなると、また、国の東西によって、差別がある。したがって、右に言う待遇表現の文末法も、地方によって、その習慣や方式に差別が見られる。

○ドッコイモ イカンゼン。
どこへも行きませんよ。

これは土佐西南隅の一例であるが、同地では「ドッコイモイカンゼ。」とも言い、この方は、対等か、少し目上に言うも

の、「イカンゼン」の方は「目上に言うものという。「ン」の音を持った方がよりよい言いかたになるという文末法は、四国に少くない。この種の、微妙な待遇機能を發揮する文末法を、異方言の人は、とらえきれぬことが多い。私がかつてこの種の事例を報告した時も、関東の人から、印刷上の誤植ではないかとの質問をうけた。

遠来の新任の先生は、しばしば、着任校の生徒児童のことばを、「荒っぽい」「野卑」だと言う。また、「このことばには敬語法がない。」とも言う。真を得ていることもあろう。が、文末法による、敬意表現の隠微な生活を見のがしていることもあ

る。国語は、自然のうちに、この簡素有力な敬意表現法を發達させていることを、今は正しくみとめなければならぬ。

しばらく、大阪府下の方言から例を引いてみよう。その南河内郡の河内村の方言生活では、

○行テケルワヨ。
は「目下に言う。」とのことである。

○サヨ(左様)ケー。
○サイケー。

の二者は「同じような言いかた」で、これらよりは、

○サヨカー。

の方がていねいであるという。「サヨカー」という文表現には、いわゆる丁寧の助動詞はない。しかし、この方が「ていねい」であるなどという。「だいで、ていねいな。」ともあった。このよ

うな「ていねい」意識、つまり、よい相手に対してのことばだとの考えが、「サヨカー」にはあるのである。しよせんは「ケー」と「カー」とのちがいである。この地に、文末詞「カイ」も

あり、「チヨ コイレテ ヤラン カイ。」(身を入れてやらぬか!)のように言い、その「カイ」が、「ケー」ともなっている。今、土人が、「サヨケー。」と「サヨカー。」とを比較して「ケー」の言いかたを下位の待遇法とするのは、やはり、「ケー」に、多少のなまりあとをおぼえるのであろう。「ケー」はほかに、

○ヤロ ケー。

やろうか。(幼い孫におばあさんが言う。)< などと、ぞんざいにつかわれている。おとなに向って言う場合にも、

○オヤッサン。スッコンデン ケー。

おやじさん。すっこんでるのかい。

など、「ケー」はある、かぎられたつかわれかたになっている。要するに、ここには、文末詞による敬語法の成り立っているのがみとめられる。

文末助詞には、たとえば「ヤ」など、地方により、またつかわれる場合によって、その待遇価に、種々の変動の見られるものがある。因幡では、「きつとありましようヤー。」のように、「ヤ」を、共通語の「ヨ」のようにつかうことがある。文末詞によってはまた、たとえば九州方言の「何々するダガ。」(何々するだろうが!)などのような、おしつけて問うことばづかいの「ガ」のように、大体、同輩以下に持つていくのにきまったものもある。

動詞・助動詞にはよらなくても、文末詞によって、待遇法を、目上に対する言いかたから、目下に対する言いかたまで、割ることができる。

文末詞とともに敬語助動詞も見られる文表現においては、その動詞本位の部分と文末詞との統辞関係が注目される。例をささきの

大阪府下の方言にかりれば、つぎのようなことがある。

○コドモ ミナハイナ。

子どもを見なさいな。

○コナイ ミナハレ ヤー。

こんなになって、まあ、ごらんよ。

ひとしく「なざる」助動詞に対して、「ナ」文末助詞は「ナハイ」命令形をうけ、「ヤ」文末助詞は「ナハレ」命令形をうけている。当方言では、これがほほ一定の傾向となっているかのようなのである。

○

方言の生活は、一方から言えば、はなはだ無自覚的なものであって、自然の流動・変動がはげしい。方言の敬語もまた、変移流動の現象をおこしがちである。一つには、そのことばをつかって敬意を表示する。その敬意の度あいの自然低下がある。低下とともに、新しい要素を付け加える、表現法補強がおこる。その複雑化した形式のうえに、形の熱合・融合がおこって、音相の変化をきたし、そこにまた新しい次元の敬意表現法——待遇法がうまれる。

一つにはまた、「ナサル」が「ナル」になるというように、語態の変化がおこり、これによって、自然のうちに、新しい待遇法が樹立され、方言敬語法の生活は開拓される。

目下、国の東西を通じて、たとえば「ゴザル」ことばや「シャル・サッシュアル」関係のことばなどは、いちじるしく退化しつつある。地域々々で見ると、退化途上のもは、さまざまに残存のしかたをしている。形式上、命令形だけのこととか、用法上、ある特殊な表現にだけ用いられるとかである。たとえば、「シャ

ル・サッシェル」ことばなど、古老が、日月星辰を神とあがめて語る時につかうのおもな用途というようなことがある。

全国的に見れば、今日は、「ナサル」関係の敬語のさかんな時代と言ふことができよう。

○ 对他尊敬法のことばづかいを、自然のうちに、自分に關し、自分の身うちの者にしておこなうことも、(その習慣化しているものも)、一種の無自覚的な現象として、方言上に、見いだされる。

○ ミミビニート ニーテハリマン デ。
耳がビニートと言つてますのよ。

これは、大阪府下の例で、自分の耳なるのことを言つているのであるが、「言うてハリマン」と敬語をつかい、「イヤハル」などという「ハル」尊敬語を出している。

九州の例を引くなら、肥後奥で、相手に自分のうちの者のことを言う時にも、

○ オンナル ガー。
おられるよ。

と言つていた。

この種のことは、一種無自覚的とは言つたが、一方から言えば、もの言いをていねいにしようとする、広い意味のていねい意識の自然のはたらきとも見られよう。ていねい意識のおもむくところ、尊敬法の敬語も、このように、転用し利用するのである。さてこのようなことは、総じて、国の西半地方にみとめられがちである。

「ヤル」尊敬語に「ます」のついた「ヤンス」「ヤス」は、や

がていわゆる「丁寧語」にもなった。方言上でもよく用いられている。これも関西以西によく見られるものである。

○ 方言の敬語生活についてとりあげるべき研究事項は多い。中に音声敬語とか、抑揚敬語法とかいう問題もあろう。九州中部以南によく聞かれる返事の「ハイ」の、ある高さのつづく音調は、じつに謙虚な表現に聞こえる。

方言敬語の生活には、一方から言えば、はなはだしく封建的なものもあろう。が、また、一方からすれば、人倫をこまやかに重んじようとするところも見られる。